

## 女性にも、愛せる歴史の権利

歴史において起こった女性の抑圧は、悲劇と言えるだろう。そのうえ、歴史の一般的な書き方は、明らかに勝者の側を選択してきた。女性たちは、人生の中で制限を受けてきただけでなく、歴史の教科書からも二重に排除されている。また、歴史の中で優先されてきた「文化」や「伝統」は、多くの場合、女性の人权侵害と結びついていると考える。例えば、「女性は従う存在である」という価値観が伝統的とされ続ける限り、その伝統は女性の自由権や平等権を侵害するものとなる。したがって、歴史、そして過去から受け継がれてきた文化や伝統の捉え方を変える必要がある。本稿では、第一に現在の歴史の捉え方の状況を示し、第二にその悪影響を検討し、第三にその解決方法を提案する。

第一に、日本の高校教科書における近世女性の扱いを通して、現在の女性史の教え方を検討する。『日本史B用語集』によれば、近世に登場する女性人物は九人にすぎず、「極少」と評価されている。また、すべての教科書に共通して記載されている女性は、出雲阿国と和宮の二人のみである。<sup>1</sup>

さらに、表1に示すように、女性に関する用語そのものの数も極めて限られている点が確認できる。とりわけ「遊里」に関する記述について、教科書では遊里が「江戸町人文化が展開した華麗な空間」や「酒落本の舞台」として描かれる一方で、「売買春・公娼制の空間として、女性の人身売買や性の搾取・冒瀆の場であったという本質には全く触れられていない」と長野ひろ子は指摘している。<sup>2</sup>

表1 高校教科書日本史B全11種にみる女性関連用語と使用頻度<sup>3</sup>

用語（使用頻度）	参考（使用頻度）
入鉄砲に出女（4）	
大奥（4）	檢約令（10）
振袖火事（2）	明暦の大火（10）
遊里（8）	酒落本（11）、江戸吉原（1）、京都島原（1）、大坂新町（1）
男尊女卑（3）	三従の教（5）、七去（2）、家長（7）、長子単独相続（1）
離縁状（5）、三行半（6）	縁切寺（駆込寺）（3）、東慶寺（4）、満徳寺（3）
娘組（1）、娘宿（1）	若者組（1）、若者宿（1）
女大学（4）	
女髪結（1）	島田鬚（1）
娘淨瑠璃（1）	
諸女（1）	
娘子軍（2）	白虎隊（2）

（出典：全国歴史教育研究協議会編『日本史B用語集』（山川出版社、2008年）から作成。  
用語は、本文・注・図版説明・整理図解・書名・美術品一覧表に限定）

以上の点から、現在の歴史教育は、男性の視点を前提とした歴史観を受け継いでいることが分かる。女性に関する記述は少なく、仮に記述があったとしても、女性の経験や被害より、男性側の利点が強調される傾向にある。教科書における「見えるカリキュラム」<sup>4</sup>に内在する不平等は、重要な課題として注目されるべきである。

第二に、現在の歴史の捉え方が生み出す深刻な悪影響として、「女性には歴史がない」という認識が再生産されている点を指摘したい。

ボーヴォワールは1949年の『第二の性』において、「女性たちには、自分たち固有の過去も、歴史も、宗教もない」と述べている<sup>5</sup>。この指摘は西洋社会に限られるものではなく、日本の文脈にも当てはまると考えられる。

例えば、日本では1913年に発表された『新らしき女の道』において、伊藤野枝は冒頭で「新らしい女は今迄の女の歩み古した足跡を何時までもさがして歩いては行かない」と述べている<sup>6</sup>。この言葉は新たな女性像の提示として重要である一方で、「新らしい女」が近代以前の女性たちと断絶した存在として位置づけられていることも示している。

しかし、ジゼル・ペリコによる「La honte doit changer de camp（恥は加える側が負うべきだ）」という言葉は、性的暴力について語られたものであるが<sup>7</sup>、歴史の扱いにも当てはまる表現であると考えられる。抑圧されてきたという理由だけで、女性が自らの先祖や過去を切り捨てるとは、十分な理由とは言えない。

第三に、「歴史をもたない女性」という像が再生産されることを防ぐための手段を提案する。

まず必要なのは、豊かでありながら「隠されてきた」女性史を、教科書の「見えるカリキュラム」に組み込むことである。その際、とりわけ重要なのは、歴史を女性の視点から再検討することである。すなわち、歴史を通じて、女性たちは「男性優位」という社会のあり方をどのように受け止めてきたのか、という問いを立てる必要がある。この問いへの答え次第では、「男性優位は日本の文化である」という理解そのものが無効化される可能性があると筆者は思う。

なぜなら、女性が男性優位の社会秩序に合意していなかったのであれば、それを無条件に「日本の文化」と呼ぶことはできないからである。日本には必ず女性も含まれており、男性のみが「それは日本の文化である」と主張する正当性はない。仮にそう呼ぶのであれば、それはあくまで「日本の男性の文化」あるいは「日本の政府の文化」にすぎないと筆者は考える。

したがって、「誰の歴史か」という問い合わせどまらず、「誰の伝統か」「誰の文化か」「誰の日本か」「誰の価値観か」といった問い合わせ連続的に検討し、過去を生きた女性自身が何を考え、何に違和感を抱いていたのかを明らかにする研究が必要である。

また、「人間」と「男性」の混同を解消する必要がある。ボーヴォワールが指摘したように、多くの文化では、男性が「人間」とされ、女性は「他者」と位置づけられてきた<sup>8</sup>。その結果、男性には人間一般的性質が付与され、女性には女性特有の性質のみが強調される。この不均衡を是正するためには、男性の「男性化」と、女性の「人間化」が必要である。例えば、ルソーは女性の自由や平等を認めなかつたにもかかわらず、一般に「自由の思想家」として紹介されている。一方、オランプ・ド・グージュはしばしば

「女性の自由の思想家」と位置づけられてきた。しかし、自由や平等を性別によって限定しないことを前提とするならば、オランプ・ド・グージュこそ「自由の思想家」と呼ばれるべきであり、ルソーはむしろ「男性の自由の思想家」と評価されるほうが妥当である。

近世女性を例に取ると、当時の支配的秩序に対して、女性が必ずしも合意していなかった可能性を、心学の研究から読み取ることができる。『和俗童子訓』には、「和順ならざる」などの状態が婦人十人中七、八人に見られると記されており<sup>9</sup>、これは多くの女性が心学的規範を十分に内面化していなかった実態を示していると解釈できると考える。さらに、遊女文化に由来する装いや流行が一般女性の間にも広がった事実は<sup>10</sup>、規範的な女性像とは異なる価値観が共有されていた可能性を補強する。

また、こうした規範からの逸脱は他の実践にも確認できる。近世女性の書物には「旅」への憧れが繰り返し描かれ、実際に許可を得ずに移動した例も記録されている。1830年には、大阪の無料宿泊所で女性の宿泊者数が上回った地域もあり<sup>11</sup>、家制度の制約を超えるとする意思の表れと考える。加えて、幽霊を題材とした歌舞伎が女性から高い支持を得たことは、「いかり」や「うらみ」といった感情が文化表現として共有されていた可能性を示唆している<sup>12</sup>。

本稿では、現代の歴史理解において、女性がしばしば過去をもたない存在として描かれ、その結果、「常に男よりも遅れた存在」<sup>13</sup>として把握されがちである点を問題とした。こうした認識は、「女性には愛せる歴史がない」という理解へつながっている。しかし、近世女性の行動や文化表現を検討すると、当時の支配的秩序に必ずしも合意していなかった可能性を読み取ることができる。

のことから、女性が肯定的に引き受けうる歴史と、男性が肯定的に引き受けうる歴史とを区別して捉える視点が不可欠であると考える。悲劇や制限の中に置かれてながらも、主体として生きた女性の姿は、「愛せる」歴史として再構成されうる。もし女性もまた「文化的な最低限度の生活を営む権利」を有する存在であるならば、そのような「愛せる」歴史を可能にすることは、教育および社会に課された重要な責務である。

## 参考文献

- 総合女性史研究会（1993）『日本女性の歴史—女のはたらき』KADOKAWA.
- 総合女性史研究会（編）（1997）『日本女性史論集1 女性史の視座』吉川弘文館、東京。
- 天童睦子（2023）『ゼロからはじめる女性学——ジェンダーで読むライフワーク論』世界思想社。
- 長野ひろ子・姫岡とし子（2011）『歴史教育とジェンダー——教科書からサブカルチャーまで』青弓社。
- Imai, Shiho (2002) "The Independent Working Woman as Deviant in Tokugawa Japan, 1600–1867", Deviance vol. 16, Ann Arbor, MI: MPublishing, University of Michigan Library, <https://hdl.handle.net/2027/spo.ark5583.0016.005> (最終閲覧日：2026年1月23日)
- 伊藤野枝（1913）「新らしき女の道」『青鞆』第三巻第一号附録。（青空文庫所収、2014年11月14日作成）
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド（1949）『第二の性II——女はどう生きるか』Gallimard、フランス。  
(原著：Beauvoir, Simone de, Le deuxième sexe, Gallimard)
- 参照 URL：  
<https://ia802803.us.archive.org/11/items/SimoneDeBeauvoirLeDeuxiemeSexe10/Simone%20de%20Beauvoir%20-%20Le%20deuxi%C3%A8me%20sexe%201%280%29.pdf>  
(最終閲覧日：2026年1月23日)
- Le Parisien (2024) "La honte doit changer de camp : des milliers de personnes dans la rue contre les violences sexistes." Le Parisien, 23 novembre 2024.  
<https://www.leparisien.fr/sentinelles/la-honte-doit-changer-de-camp-des-milliers-de-personnes-dans-la-rue-contre-les-violences-sexistes-23-11-2024-7OGT7MKJZNABFGPFA7ERV2JIQY.php>  
(最終閲覧日：2026年1月23日)
- 中村学園大学校訂テキスト編集委員会（編）  
貝原益軒『和俗童子訓』巻之五「女子に教ゆる法」  
(宝永七年〔1710〕成立), 中村学園大学校訂テキスト。  
[https://www.nakamura-u.ac.jp/institute/media/library/kaibara/text04\\_1.html#sec06](https://www.nakamura-u.ac.jp/institute/media/library/kaibara/text04_1.html#sec06)  
(最終閲覧日：2026年1月23日)
- 文化デジタルライブラリー「歌舞伎—南北劇の特徴」  
<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc15/tokusyoku/yakudokoro/ya4.html>  
(最終閲覧日：2026年1月23日)

- 1 長野ひろ子・姫岡とし子(2011)『歴史教育とジェンダー——教科書からサブカルチャーまで』青弓社 p151
- 2 同上
- 3 長野ひろ子・姫岡とし子(2011)『歴史教育とジェンダー——教科書からサブカルチャーまで』青弓社 p152
- 4 本稿で用いる「見えるカリキュラム」という表現は筆者によるものであるが、その概念は「隠れたカリキュラム (hidden curriculum)」の議論に基づいている。隠れたカリキュラムとは、教科書や授業内容として明示されないものの、教育実践を通して無意識のうちに価値観や規範、権力関係が再生産される仕組みを指す。これについては、天童睦子(2023)『ゼロからはじめる女性学——ジェンダーで読むライフワーク論』(世界思想社)第5章「教育・スポーツ文化をジェンダーで問い合わせる」を参照した。
- 5 ボーヴォワール, シモーヌ・ド (1949)『第二の性II——女はどう生きるか』, Gallimard, フランス。  
原著: Beauvoir, Simone de, *Le deuxième sexe*, Gallimard.  
参照 URL: <https://ia802803.us.archive.org/11/items/SimoneDeBeauvoirLeDeuximeSexe10/Simone%20de%20Beauvoir%20-%20Le%20deuxi%C3%A8me%20sexe%201%280%29.pdf>
- ※本にはページ番号の明示がないが、本 PDF 版では p21 にある
- 6 伊藤野枝(1913)「新らしき女の道」『青鞆』第三巻第一号附録。(青空文庫所収: 2014 年 11 月 14 日作成)
- 7 La Parisien (2024) "La honte doit changer de camp : des milliers de personnes dans la rue contre les violences sexistes." Le Parisien, 23 Novembre 2024.  
<https://www.leparisien.fr/sentinelles/la-honte-doit-changer-de-camp-des-milliers-de-personnes-dans-la-rue-contre-les-violences-sexistes-23-11-2024-7OGT7MKJZNABFGPFA7ERV2JIQY.php>
- 8 ボーヴォワール, シモーヌ・ド (1949)『第二の性II——女はどう生きるか』, Gallimard, フランス。  
原著: Beauvoir, Simone de, *Le deuxième sexe*, Gallimard.  
参照 URL: <https://ia802803.us.archive.org/11/items/SimoneDeBeauvoirLeDeuximeSexe10/Simone%20de%20Beauvoir%20-%20Le%20deuxi%C3%A8me%20sexe%201%280%29.pdf>
- ※本にはページ番号の明示がないが、本 PDF 版では p19 にある
- 9 中村学園大学校編集テキスト編集委員会(編)宝永七庚寅年初夏日／貝原益軒『和俗童子訓』卷之五女子に教ゆる法, [https://www.nakamura-u.ac.jp/institute/media/library/kaibara/text04\\_1.html#sec06](https://www.nakamura-u.ac.jp/institute/media/library/kaibara/text04_1.html#sec06) (最終閲覧日: 2026 年 01 月 23 日)
- 10 Imai, Shiho (2002) "The Independent Working Woman as Deviant in Tokugawa Japan, 1600–1867", Deviance vol. 16, Ann Arbor, MI: MPublishing, University of Michigan Library, <https://hdl.handle.net/2027/spo.ark5583.0016.005> (最終閲覧日: 2026 年 1 月 23 日)
- 11 総合女性史研究会(1993)『日本女性の歴史—女のはたらき』KADOKAWA. p166
- 12 文化デジタルライブラリー 歌舞伎の「南北劇の特徴」のページから,  
<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc15/tokusyoku/yakudokoro/ya4.html> (最終閲覧日: 2026 年 01 月 23 日)
- 13 総合女性史研究会(編) (1997)『日本女性史論集 1 女性史の視座』, 吉川弘文館, 東京, p 129